

「共有」への物語

内川 朗子

二〇一一年三月十一日の東日本大震災の後、児童書でも地震や原子力に関する本が注目されている。大人も答えが見出せない状況の中で、子どもたちもまた、それを受け止めるための物語を求めていると思う。中でも私がインパクトを受けた本の一つが、八起正道『ぼくのじしんえにっき』（伊東寛絵 岩崎書店 一九八九）だった。平和な日常が地震により一変、混乱する事態は人間同士の感情にも軋轢を生む。その様子を小学校低学年の男の子の視点でながめ、ひらがなの多い文章で淡々と綴られる物語は、リアルな深刻さとユーモアが共存する。一九九四年のフォア文庫版に書き下ろし収録の「つなみ」も合わせ、知らずにいた不明を恥じるとともに、平易なやさしい言葉で表現できる内容の

深みと幅に、改めて気づかされる思いがした。

○悩みへの共感、だれかという喜び

この年の低学年向けでは、人々の暮らしに身近な日本の神さまを主人公に、のびやかな生命力の宿るやさしいお話にした「ゆかいな神さま」シリーズ（新日本出版社）が完結。岡崎ひでたかと山口節子が三巻ずつ担当しており、最終刊行の山口節子『おどって！ウズメ』（里見有絵）では、ただ一つ得意な「踊ること」に一生懸命なウズメが、欲にとらわれた人々をはっとさせる、無邪気な笑顔に見入った。

全体に女の子のうまく表に出せない繊細な心情を描くものが目にとまった。中脇初枝『あかいくま』（布川愛子絵 講談社）では、淋しい気持ちの女の子が、自分をぬいぐるみの親友と同じあかいくまだと思ひ込む感覚が、絵の色合いとともに鮮やか。人に伝えられない気持ちや感覚が、具体的なイメージに昇華される。比べてもっと楽天的なのが、一年生への期待感あふれる吉田純子『一年一組ミウの絵日記』（市居みか絵 P H P 研究所）のミウ。思いがけない面を持った友だちへも、素直で柔軟なまなざしを向ける。学校での体験と不思議な出来事でどきどきが伝わる北川チハル『いちねんせいがあるきます！』（吉田奈美絵 ポプラ社）もシリーズ化している。

一人では見えない景色が、誰かと一緒の時間で見えてく